

氏名	小野真 ^{まこと}
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第143号
学位授与の日付	平成11年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科宗教学専攻
学位論文題目	マルティン・ハイデッガー研究 ——死と言葉の思索者——

論文調査委員 (主査) 教授 長谷正當 教授 藤田正勝 助教授 杉村靖彦

論文内容の要旨

本論文はハイデッガーの公刊された全集の研究に基づき、その初期から後期に至るまでのハイデッガーの思索の変遷と深化を辿ることによって、その全体像の構築を試みたもので、全体は6章からなっている。

第一章では、初期フライブルク期の諸講義に基づいて、ハイデッガーの生の思索が扱われ、その生の根源性を損なわずに表出する概念性である「形式的告示」の生成過程が明らかにされる。

ハイデッガーの独自の立場への「突入」は、一九一九年に始まる。彼は「理論的なものそれ自体がそこから起源する真の始元—学 Ur-wissenschaft」の提示を試み、生が端的に有る、という事柄を言葉にもたらそうとする。それは「世界となる es weltet」や「性起 Ereignis」といった表現で語られる。これらの語は後年、有の思索の根本語として再び現れるが、このことは、「生の根源領域」への眼差しがハイデッガーの有への問いに常に伴っていることを確認している。

初期フライブルク講義を通じて、「事実的生」の根本領域が次第に分節され、様々に語られていく。それらの生の根本的傾向は、即自的に留まろうとする「自足性」、意味連関から諸々の世界を理解する「有意義性」、そして生自体が自己表出せんとする「表現」である。それら諸傾向の根底には「動揺」という生の根本特徴が潜んでいる。生の根本領域は、常に得体の知れない動揺をもって自足的な生を脅かし、また表出せんとしている。そういった生の動揺を疎外することなく表現する概念性を探求することが、若きハイデッガーの大きな課題の一つである。その概念性として「形式的告示 die formale Anzeige」が練り上げられていく。

言葉は、事柄を固定化し、理論的に眺める傾向を持つ。それゆえ、生の根本領域を言葉にもたらそうとするハイデッガーの試みもまた、かえって生の動揺を固定化し、生の流れを疎外する危険をはらんでいる。それゆえ、形式的告示は生の根本領域を語るとき、その内容については立ち入らず、形式的に留まるという戦略をとる。生について語る場合、終局的な規定を与えるという仕方では語れない。むしろ形式的に規定させ、未決のままで語ることによって、固定化されえないものとしての生へ向けて告示し、そのような生の理解への参与を促す。形式的告示は、いわば端緒的であり、途上の一時熟遂行的性格であり、固定的理論的な概念性へと陥ることに抗する禁止的機能を本質とする。

第二章では、マールブルク期のハイデッガーが、彼の生の思索をオントロジー化して『有と時』へと練りあげていくダイナミックな過程が、諸思想家との対決に焦点をあてつつ、描き出される。

若きハイデッガーの事実的生についての思索は、アリストテレスとの対決を通じてオントロジー化する。根源的生への視線を妨げているのは、ギリシャ的な概念構制であり、とりわけ「有」の理解であることが深く自覚されてきたからである。生を根源的に取り返すためには、伝来の有の理解との対決が不可避となり、オントロジーがハイデッガーの問いの中心に据えられる。この問いは、伝来のオントロジーが生い茂った生経験より、より根源的なハイデッガーの生の根本経験から発せられている。それゆえ、形式的告示は、そのままハイデッガーのオントロジーにおける概念性として保持される。形式的告示は、『有と時』をへて一九二九/三〇年冬学期講義まで維持される。

ハイデッガーのオントロギーはアリストテレスの「真理（アレータイア）」としての有の規定から、有と時との関連という洞察に至る。端的な現前（現在）としての真理において「有」と「時」との根源的な関係が煌めく。ハイデッガーは、この洞察をフッサールのカテゴリー直観の着想に基づきつつカントの時解釈を読み説くことによって、有が時という一定の形式をもった（カテゴリー的な）端的な自己触発として現前するという『有と時』のモチーフを獲得する。このモチーフを獲得した一九二五／二六年冬学期講義ですでに、時（＝有）は、有るものに現前を与えるが、それ自身は「さしあたり覆蔽されたまま *verborgen*」であるということが予感されていた。

「時」という形式的告示はこの有の「覆蔽性」へと向けて告示している。

マールブルク期においては「死」の概念も、有と言葉への問いと必然的な連関をもって問い直される。死は人間の生理的過程の終着点ではない。生が、死を、絶えず差し迫る、自分の不可能性の可能性として理解し、そのようなものとして死へと態度をとるということが、頹落傾向に対抗しつつ生の本来的な有の性格へと向かう運動であり、そのとき現有は「時性 *Zeitlichkeit*」として把握されうる。死を想うことを介して生の有の性格が初めて時性と捉えられる。『有と時』の根本洞察に至る過程で、有は、有るものに現前を与える瞬間に自己覆蔽する瞬機（カイロス）的なものとして経験されていた。現有は常に自己の有とともに有るものにかかわる（実存）が、有るものの有が瞬機的に与えられることを眼差すには、まず現有自身の有の理解をギリシャ的な「不死性（永遠性）のドグマ」から解放しなければならない。現有が「死」という不可能性の可能性をはらんだものであることを理解することによって、はじめて有への問いと有の語りが可能になる。

このようにハイデッガーの有、死、言葉の思索はそれぞれ本質的連関をもっているのであるが、その初めての結晶が『有と時』における「先駆的覚悟性」である。第三章では、この先駆的覚悟性をめぐる、『有と時』の持つ問題群についての究明が試みられる。

先駆的覚悟性は、「言葉の実存論的基礎」である「話 *Rede*」による現有の有の根源的分節によって導かれる。「話」は、現有の時間性における脱自態と直結する「理解」、「情態性」、「頹落」とともに現有の構成要素として挙げられるが、むしろ各脱自態に浸透し、それらの変容の動因となるものである。現有の「根源的な話」が機能する先駆的覚悟性においては、常に死としての現有の「無性 *Nichtigkeit*」が差し迫っており、先駆的覚悟において発せられる言葉は、無性に由来する沈黙の様相を持つ。つまり、現有の根源的な言葉とは死を語るものであり、その時初めて現有の無性の彼方に有を問う地平が開かれうる。その言葉に相応しい概念性はまさに形式的告示となる。形式的告示によって、現有の無性という常に未決のものへと先駆する実存そのものが表現され、保たれる。

しかし、『有と時』では、現有の無性と有がはらむ無の関係は暗いままでとどまり、時性の地平的図式から有を解釈する試みは途絶する。というも地平的図式が依拠する理解の「企投－意味」構造が、なおも超越論的主観の残滓をはらんでおり、有るものと有の差別を思惟するに際して、有るもの同士の違いの関係を投影せしめていたからである。晩年のハイデッガーは、自分の思索の三つの歩みを回顧し、「意味－真理－場所」と表現しているが、「意味」（『有と時』）は、その挫折を超越せんとして「真理」の問いへの歩みを始める。

その過渡期にあるのが、一九二八年の形而上学構想（メタ・オントロギー）であった。第四章では、この過渡的な形而上学構想期の思索の動きが明らかにされる。形而上学構想は、「全体としての有るもの」へと投げ込まれている現有の有の理解の有限性への洞察が次第に深められ、被投性が重視され、神・自然の有も問われるが、基礎オントロギーの構造を温存しているという限界があった。そこで一九三〇年以降、『有と時』の「内在的批判」が始まり、「真理」としての有の経験が端的に問われることとなる。

第五章では、「真理」への問いの成立から、第二の主著『哲学への寄与』に至る、所謂「有の歴史」の思索の成立過程が追跡される。

プラトンの洞窟の比喩に即した真理への問いにおいて、真理の根本的本質が覆蔽性（レーテー）であり、有が「自己覆蔽 *Sichverbergen*」という動性をもったものであることが自覚されてくる。有は有るものに有を授けることによって、それ自身は覆蔽する。人間がその有るものに執着することによって、有それ自身は人間を棄却し、覆蔽を達成する。有の忘却は、そもそも有自身に由来するのである。ハイデッガーによれば、有が覆蔽性として経験された「第一の元初」があったはずだが、西洋哲学の歴史はこの元初の経験を喪失し、有が有るものに授ける有るもののみを表象し、計算可能なものに貶めた「形而上学」の歴史であり、それはニーチェに極まる。同時に、形而上学の歴史全体を照射する「別の元初」としてヘル

ダーリンの詩作が登場する。

こういった真理への問いから生じた「有の歴史」の思索は、第二の主著『哲学への寄与（以下『寄与』）』へと結実する。『寄与』では、現有と有の相互に「転回的 kehrig」な根拠付け関係である「性起」の「本質構造」が説かれる。人間は有によって、本来的な有である「現一有」へと性起化され、他方、有は現一有が有を守護することによって現成する。従来議論されてきたハイデッガーの「転回」とはこの性起における人間と有の転回関係を指すと解すべきである。

さて、この有への人間の帰属と有による人間の必要という関係は、人間が有の根源的覆蔵性に気づき、その覆蔵性を覆蔵性として守護するときに成立する。しかし、この性起は二つの元初の「間」にいる我々にはまだ起こっていない。半神としてのヘルダーリンの詩作のみが、「別の元初」の到来を詠い、我々に有の「歴史の法則性」を告げる。思索者の召命は、ヘルダーリンの詩作から合図を受け取り、「形而上学」の直中であって、これを耐え抜きつつ、第一の元初へと戻り道を行くことである。「戻る歩み Schritt zurück」は、有の歴史の観点から形而上学の歴史を読み解き、ヘルダーリンの詩句が真正に聴かれうるように準備をすることである。詩人は神聖性を帯びたものであり、思索者との間には裂け目があるが、この別の元初の準備において両者は共働する。

また、『寄与』においては「形式的」という語は冠せられないものの、「告示」は多用され、形式的告示の概念性も保持されていると考えられ得る。しかし、そもそも「告示」することには、なんらかの主観性の能作の残滓が付着していた。それでも「告示」が用いられることは、詩人と思索者の言葉の差異に由来する。詩人は別の元初から、有によって性起され直接的に有を語る。しかし、思索者は、両足を形而上学という大地に根付かせたまま、性起を準備しなければならない。つまり、「形而上学の言葉」と完全に手を切ることはできない。それゆえ、形式的告示の禁止的機能自体は保持される。とはいえ、性起の準備をする思索者の言葉の尺度となるのは詩人の語であり、それに倣って積極的に元初を指し示すモメントが必要とされる。従って、性起の思索の言葉の理念は、告示的性格を残しつつも形式的告示とは異質なものとなる。それは、形而上学から別の元初への転換を告げ知らせる「合図 Wink」である。思索者は、詩人からの合図を受けとめつつ、自分自身も形而上学の直中にいる人間達に合図を贈る。形而上学の言葉と関わりつつも別の元初への転換を説かねばならぬ苦境の中から、ハイデッガーは、「有」に×印をつけたり、「真理の本質は本質の真理」といった奇妙な表現を合図として用いる。

さて、「性起」は既に『寄与』において「自己覆蔵の明るみ die Lichtung des Sichverbergens」という「場所」的な表現で端的に言い表されていた。ハイデッガーの思索の最後の歩みである「場所」は一九三六／三八年の『寄与』において始まる。しかし、本論は「真理」から「場所」への移行を漸次的なものと考え、『寄与』に始まった移行の完成を一九四九年のブレーメン講演とする。第六章において、この「場所」の思索が精査され、晩年の「言葉が語る」、「静けさの響き」といった謎めいたキーワードが明らかにされる。「真理」から「場所」への移行における大きな転換点は、一九四四年のヘラクレス講義におけるロゴス解釈である。この講義では有が元初的なロゴスと等置され、それ自身の覆蔵性への「結集 Versammlung」と解釈される。「場所」としての有を言うこと（トポロジー）は、根源的覆蔵性へと結集する有（ロゴス）に自らも結集されつつ、有を守護することである、との洞察に至る。こうしてブレーメン講演で、既に『寄与』で思索されていた「性起」が初めて公に語られ、他方で「真理」という語が「守護 Wahrnis」に読み替えられて空洞化し、「場所」への移行が完了する。

このような「結集」と「守護」という「場所」の思想は、性起における死の思索の根本語である、「有の山並み das Gebirg des Seyns」という表現にも現れる。Gebirg とは「保蔵すること (bergen) の結集 (Ge-）」であり、死が、有のもつ覆蔵性を最高度に保蔵していることを表現している。人間がその固有性にもたらされるのは、死へと先駆して自分を「死すべき者」と自覚するときであり、このとき同時に死の彼方に潜む有の覆蔵性も覆蔵性として守護される。また、不死なるものとしての「神的なるものたち」も死すべき者の照り返しで際だたされ、「四方界 Geviert」が現成する。

もっとも、四方界の現成も、人間の能作ではなく、有によって性起された詩人の言葉を通じて、有自身からの合図によってなされる。それゆえ、「言葉（有）が（詩人の語を通じて）語る」という事態が生じるのである。また、ハイデッガーはこの事柄を「道一拓き Be-wegung」という表現でもって言い表そうとする。詩人（有）の言葉の「道一拓き」は、「原野に敵間を引く」と表現された思索の営みと呼応している。歴史全てを揺り動かして、有へと道一拓く「語りかけ」に呼応して、形而上学の言葉に敵間を引いて、種蒔きの準備をするのが思索の営みであり、思索の合図の贈り方である。

こうした死と言葉についての晩年の思索は「静けさの響き das Geläute der Stille」という語へと結晶する。有としての

「言葉が語る」という事態は、有の覆蔵性に由来するゆえ、「静けさが静める die Stille stillt」と表現される。一方、「有の山並み」としての死は、「有の原形姿 Urfigur」であり、教会の鐘音である「響き」として我々に迫ってくる。有の覆蔵性は、まず死という最も身近に現認できるものとして、鐘搭の響きのように迫ってくる。その響きに揺り動かされ、詩人の語を聴こうとする我々は、その詩人の語の内に再び「響き」を聴きとることができるであろう。覆蔵性（有）による被投性としての死と、覆蔵性への企投としての言葉は、相即しつつ我々に別の元初の予感をもたらす。

こうしてみるとハイデッガーの思索の道とは、生の根源領域、根源的な時、そして有の覆蔵性といった、死を「原形姿」として迫ってくる「顕現せざるもの das Unscheinbare」の現れ（現象）を「ロゴス」にもたらそうとする営みであり、まさに「顕現せざるものの現象学」と呼ぶことができるであろう。ハイデッガーにおいては、死と言葉と有の思索は常に相即しつつ展開されているのである。

論文審査の結果の要旨

ハイデッガーの全集の公刊とそれらの研究の進捗によって、近年ハイデッガー像は大きく変わりつつある。とりわけ、初期フライブルク諸講義と後期の『哲学への寄与』の刊行は、ハイデッガーの思索の道をその全体において通覧し、その全体像を提示する可能性を開いた。本論文は、そのような研究状況に呼应しつつ、公刊されたハイデッガー全集の丹念な読破に基づいて、初期から後期に至るまでのハイデッガーの思索の変遷と深化を克明に辿り、とりわけ、これまで多分に不明確なところを残したハイデッガーの初期と後期の思索の解明に比重をおいて、ハイデッガーの全体像の構築を試みたものである。全体は6章からなっている。

ハイデッガーが有名になったのは『有と時』によってであるが、ハイデッガー自身はこの著作を失敗作と認めて、当初予定していた本書の第一部第三節と第二部の刊行を断念し、ハイデッガーの思索はその後、紆余曲折を経て大きく変貌をとげるようになった。それで、『有と時』を境にして、ハイデッガーの思索は『有と時』に至るまでの初期、『有と時』の中期、『有と時』以後の後期と、三つの段階に分けられることになるが、前期および後期の著作が出揃っていなかったため、後期の思索については多様な解釈を生み、前期の思索の研究にいたっては漸く着手されたばかりの状態であって、ハイデッガーの全体像を描くことは困難であった。

本論文において論者は、新しく公刊された全集を基に、とりわけ、前期のフライブルク諸講義および後期の『哲学への寄与』を手掛かりにして、従来の研究がとどめていた難点を克服し、ハイデッガーの思索の生成と構造を解明しつつ、一つの纏まったハイデッガーの全体像を描き出した。本論文は従来のハイデッガー研究の枠を超えて、今後のハイデッガー研究の一つの方向を示すものとして大きな意義を有する。

本論文の優れた特徴は以下の諸点に認められる。

1) 『有と時』において「存在的」(ontisch)と区別されて「存在論的」(ontologisch)と規定された諸々の「実存疇」(現有、世界内存在、理解、状態性……など)が生み出されてくる源となったものを、論者は初期ハイデッガーの思索に探り、それを「形式的告示」(die formale Anzeige)という概念に見いだしている。そして、それがもつ二つの側面、すなわち根源学の形成と心理主義の克服という狙いを、当時のベルクソン、ラスク、ナトルプ、フッサールなどに対するハイデッガーの批判的吟味を考察しつつ明らかにしている。初期ハイデッガーの思索におけるこの「形式的告示」という概念への着目は、ハイデッガーの実存疇の成立過程を明らかにするものとして大きな意義を有している。

2) 本論文において論者は、ハイデッガーの用いる「転回」(Kehre)の概念が「思索の転回」ではなく「転回の思索」を示すものであることを明らかにする。ハイデッガーの有の思索は『有と時』では「現有の分析」を基点としていたが、後期には有から呼びかけられる「性起」(Ereignis)の概念を基点とすることへと移行している。「転回」の概念は、従来この思索の移行を指すものと理解されてきた。しかし、論者は、「転回」の概念が現有と有の相互の「転回的 kehrig」な根拠付けの関係をあらわし、「性起」の本質構造を示すものであることを明らかにする。つまり、人間は有によって本来的な現有へと性起され、他方、有は現有による守蔵によって現成することであると示す。論者のこの見解は、ハイデッガーの中期と後期の思索の断絶を強調する従来の解釈の片寄りを正すものとして注目すべきものである。

3) ハイデッガーの有の思索は有の「意味」から有の「真理」へ、そして「場所」へと深まってきているが、論者は、その深化の過程において「有の覆蔵性」が、有を有として守蔵するものとして、次第に重視されてくることを示す。そして「死」

を覆蔵性に属するものであると捉えて、死を「有の山並み」(das Gebirg des Seyns)とする後期の「ブレーメン講義」の謎めいた言葉を解釈している。つまり、有の覆蔵性に属するものとしての死は有を有として守蔵するものであること、死は有の「証し」(Zeugnis)であることを明らかにする。こうして、中期の有の思索と後期のそれとが死の問題を通して繋がっていることが明らかにされる。

4) 論者は、ハイデッガーの有の思索という根本の主題を貫いている副主題を「死」と「言葉」として捉え、死と言葉と有の思索との関わりの変遷を、それぞれの時期において入念に考察している。とりわけ、「アレタイアー(真理)」や「性起」の概念における覆蔵性と非覆蔵性の関係を死と言葉との結び付きから追究した分析には見るべきものがある。ハイデッガーの有の思索を死と言葉という角度から捉えた論者の視点はハイデッガーの思索の骨格を捉えたものであり、この視点に立つことによって論者はハイデッガーの全体像を描き出すことに成功している。

これまで出版されたハイデッガーの主要テキストのみならず、これまで未刊であった講義録やその他のテキストの入念な考証や跡付けという大きな努力と忍耐を要する作業を通してハイデッガーの全体像を描き出した本論文は、今後のハイデッガー研究の一方向を指し示すものとして大きな意義を有するものである。ただ、本論文に惜しまれる点は、論者がハイデッガーの思想の全体を通覧することに急で、個々の問題の考察に不十分なところを残していることであり、この点は今後の研究において補われるべきものである。しかし、これは本論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)論文として価値あるものと認められる。1999年9月16日、調査委員が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。